**『満州暴走　隠された構造　大豆・満鉄・総力戦』**

令和3年11月23日　小林

* 本書は、2015年6月、角川新書、著者は、安富歩(やすとみあゆむ)♀、京大経済卒、東大修士、東大東洋文化研究所教授。
* 本書は、なぜ満州の日本陸軍(関東軍)は暴走したのかを多角的に論じたものです。経済学者なので貨幣や物資流通の観点から『満州』の特殊性を説明している部分もあるが、やや分かりづらかったので一部省略しました。悪しからず。
* 参考までに。著者は、福島原発事故に際して東大卒の原子力専門家や学者(特に池田信夫)や官僚が、特殊なロジックや言語により原発の危険性について一般人を欺くようなコメントをすることに腹を立て、これを**『東大話法』**と名付け話題になった。
* 『東大話法』の実例を一つ。池田信夫いわく「原発の危険性は最悪の場合に何が起きるかという最大値が問題である。福島原発は最悪の事態に見舞われたが、起きた災害の程度から見れば、この事故は原発の安全性を証明したと言える」。要は、原子炉自体が爆発してないから「安全だ」ということのようです。
* ちなみに、池田信夫は情報通信の経済学が専門で、いつもNTTの味方をしていました、ソフトバンクやその他事業者の意見をバカにしたようにけなしていて、私は池田信夫が大嫌いでした。

◀池田信夫・元NHKディレクター、国際大学教授、アゴラ主宰者。

**それではまず、満州の歴史を概観します。**

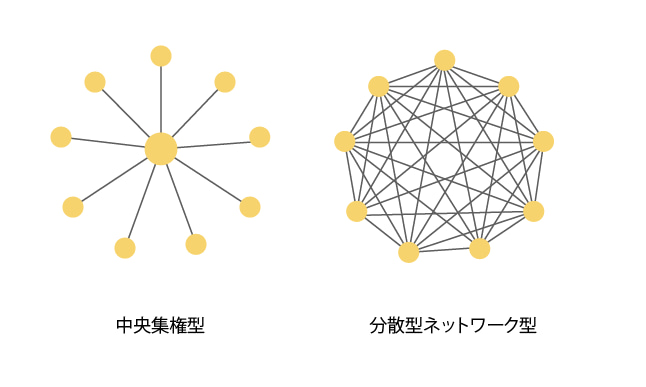
* 清国は、**満州を父祖の地**とする女真族が明国を倒して建国した中国最後の王朝です。1644年から1912年の辛亥革命・中華民国建国まで続きました。
* 1894年、**日清戦争**の結果、下関条約が結ばれ、日本への領土割譲が合意されました。**満州最南端の遼東半島**と台湾(澎湖列島を含む)が日本領となりました。が、これを面白く思わない**ロシア**、ドイツ、フランスが日本に圧力をかけて日本の**遼東半島**領有を断念させます。これが日本陸軍にとって大きな**挫折・しこり**となり、後の満州進出の遠因となりました。
* 1904年、朝鮮半島の支配権をめぐって**日露戦争**勃発。これは、ロシアが満州に鉄道敷設権を獲得した後、朝鮮国境付近に勢力を伸ばしつつあったため、ロシア軍と日本軍が軍事衝突したものです。
* 日露戦争に勝利した**日本はロシアから南満州鉄道を獲得**。日本陸軍は南満州鉄道とその付属地(駅舎の土地など)の防衛のためとして満州に陸軍を駐屯させました(**関東軍**)。これが中国大陸への最初の足がかりとなりました。
* 1912年、清国滅亡により無政府状態になった満州は、**満州軍閥のリーダー張作霖**が実質的な支配者となりました。ちなみに、中国の軍隊は独立性が強く、各地の軍隊は自分で課税徴税して中央政府の統制から離れる傾向が強い。特に満州は万里の長城の外にあり、文化・習慣の違いが大きく(弁髪など)、独立性の強い地域でした。
* 張作霖は、1916年に奉天省の権力を握ると、1919年には吉林省、黒竜江省も手中に収めました。1927年には中華民国の大元帥に就任、実質的な満州の支配者となりました。
* この張作霖を倒せば満州が手に入ると考えた関東軍は、**張作霖の乗る列車を爆破**して張作霖を殺害しました(1928年)。しかし、息子の**張学良**が軍閥の実権を握り、関東軍は、満州国を手に入れることはできませんでした。
* 1931年9月18日、奉天近郊の**柳条湖**で満鉄線路が爆破されるという事件が起きました。これを契機に関東軍は満州各地を占領し中華民国軍(張学良軍)を逃走させました。なお、この事件は後に**石原莞爾**と**板垣征四郎**が計画実行した謀略と判明しています。
* この事件に呼応して、朝鮮駐屯の**林銑十郎**(後、首相)が率いる日本軍は、独断で朝満国境を越えて関東軍を支援した。当時、満州は日本から見ればれっきとした外国であり、この**越境軍事行動**は無断での海外派兵。軍事刑法違反の大罪です。しかしながら、**若槻礼次郎首相**はこれを追認してしまいました。これは、既成事実に弱く、相手の**「立場」**をおもんぱかってしまう**日本人の思考**丸出しでした。(**「立場」**については後述)
* **わずか3カ月ほどで満州全土を軍事制圧した関東軍**は、1932年3月1日満州の独立を宣言し**満州国が建国**されました。
* 1937年7月7日**盧溝橋事件で日中戦争**勃発。なお、この事件において日本・中国いずれが先に発砲したかいまだに謎のままです。政府の不拡大方針もなんのその、軍部は戦線を拡大していきます。北方のソ連を仮想敵国とした満州の獲得でしたが、戦線は南方へ拡大し、終戦直前には満州の兵力は手薄になり、これが結局ソ連軍の満州蹂躙を許すことになりました。

**満鉄(南満州鉄道株式会社)**

* 南満州鉄道は、ロシア(後、ソ連)から獲得した当時は、南北と東西に走るほぼＴ字路の路線しかなかったが、その後、路線を網の目のように張り巡らせて、1945年の終戦時にはほぼ満州全域を覆うまでに延長された。具体的には、当初1,100kmの路線は1万km超に延長されました。
* これは、ソ連国境付近に速やかに軍隊を移動させるためであり、もう一つの目的はその当時、国際的な輸出商品となっていた**大豆**の輸送のためでした。
* 満州は**大豆の一大生産拠点**であり、満州に莫大な外貨をもたらしました。なお、満州ではトウモロコシ、コウリャンも栽培されていたが、ほぼ自家消費され、流通商品にはなっていなかった。つまり、満州は**単一商品を基盤とした社会構造**になっていたということです。
* すなわち、各都市の周辺地域から大豆をその都市に集荷するという**単純な中央集権型の流通ルート(下図参照)**が形づくられていました。大豆集荷都市には満鉄の駅があるので、鉄道で大連などの港湾都市に運ばれ輸出されました。
* このような中央集権的な流通ルートは、満州の都市構造・社会構造をも形作っていました。**軍事的な観点から見ると、このような都市構造・社会構造を持った地域は軍事力によって制圧するのが容易です**。なぜなら、集約点にある都市を制圧すれば周辺市町村の機能が止まるからです。つまり、**点を抑えれば面を取ることができます**。
* これが、**3カ月ほどで満州全土を軍事制圧できた一つの要因でした。**

**満州とは異なる中原18省**

* ところが、万里の長城以南の中国大陸(中原18省)では状況が異なっていました。都市構造・社会構造が異なっていたのです。中原18省は**多様な商品で経済**が成り立っていました。**綿花、落花生、葉たばこ**です。
* このような多種類の流通商品が生産されていたため、商品ごとに各地に取引市場が成り立っていて、その結果、商品の流通ルートが網の目のように張り巡らされていました。つまり、中央集権型ではなく、**分散ネットワーク型でした**。



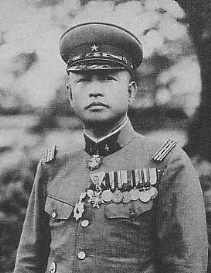
* **分散ネットワーク型の社会構造においては、一つの都市を軍事制圧しても面を抑えることができません。**ある都市の機能は他の都市が代替できるからです。
* 南京が陥落しても重慶が機能を代替できたのです。これが、**日中戦争泥沼化**の一因です。

**総力戦と戦略爆撃**

* ヨーロッパで起きた第1次世界大戦は、歴史上初の**『総力戦』**と言われています。それまでの戦争は、軍隊が広い場所(戦場)で対決して軍隊の勝ち負けが決まり、これで戦争の勝ち負け＝国の勝ち負けが決まっていました。ところが第1次世界大戦では、ある戦場で負けても新たに軍隊・武器を繰り出してさらに戦いが続きました。国家の総力(軍隊の総力ではなく)をかけて戦う総力戦になりました。
* この総力戦の現実を知って衝撃を受けたのが**石原莞爾**です。彼は考えました。『現在の日本の国力では総力戦は行えない。総力戦を行うためには満州を領有してそこに近代的な産業を興し、日本の国力を高めなければいけない』。この考え方は日本vs.米国の『世界最終戦争』の思想につながっていきます。
* この総力戦の中で出てきた考えが、**戦略爆撃**です。戦略爆撃とは国の大都市、大工場、多数の市民を破壊殺りくして国家としての戦争継続の意思を破壊しようというものです。東京大空襲やその他都市の空襲、広島・長崎への原爆投下はまさに戦略爆撃でした。
* 史上初の戦略爆撃は、**スペイン・ゲルニカへの爆撃**です(スペイン内戦)。ただし、国家の首都に対する史上初の戦略爆撃は日本軍により行われました。**重慶爆撃**です(合計218回の爆撃)。
* しかしながら、重慶爆撃は効果がありませんでした。社会構造が分散ネットワーク型だったからです。中心都市をたたいても周辺地域は機能不全しませんでした。分散型ネットワーク構造なので、(1)中心都市の価値が相対的に低く、(2)中心都市の機能を他の都市が代替できるためです。これで日中戦争泥沼化していきました。

**陸軍三羽烏－石原莞爾と永田鉄山と小畑敏四郎**

* 上述のとおり、**石原莞爾**は日本の国力では総力戦を戦えないため、総力戦を恐れていました。そしてもう一人**総力戦を恐れていた**のは、**永田鉄山**でした。彼は**統制派**のリーダーです。日本の政治・経済・社会を強力に**統制**して総力戦を戦える国家にしなければならないと考えました。軍部中心の軍事国家です。
* これに対して、天皇を中心とした国家改造を目指す**皇道派**は、統制派を天皇の権限を侵犯せんとする一派ととらえ対立します。**皇道派の相沢三郎中佐**は、執務中の永田鉄山を軍刀で惨殺します(1935年)。当時、永田は軍務局長という陸軍省No.3の地位にありました。前代未聞の事件です。
* その6カ月後の2月26日、皇道派の青年将校が2.26事件を起こします。この事件の背景には皇道派と統制派の路線対立があり、そのまた背景には**総力戦への恐怖**があったと言えます。これ以降、軍部の暴走が加速していきます。

　石原莞爾　　　　永田鉄山　　　小畑敏四郎

* 参謀本部第三部長を務めていた**小畑敏四郎も総力戦を恐れていた**一人です。彼は、総力戦を戦えない日本は**短期決戦**でなければならないと考えました。短期決戦なので**武器弾薬、食料等は補給する必要がありません**。したがって、彼が携わった『統帥綱領』改定では、**「兵站」の項目が削除**されました。
* この兵站の無視・軽視という思想が日本軍敗北の根底にあり、その背景には**総力戦への恐怖**があったのです。

**石原莞爾の出世と転落**

* 天皇の統帥権を無視して、満州で独断的な軍事行動を指揮した中心人物の石原莞爾は、出世します。関東軍から東京の参謀本部作戦部長に昇進異動します。
* 盧溝橋事件を契機に日中全面衝突となり、関東軍は政府の不拡大方針を無視して、中国南部へ戦線を拡大していきます。**石原はこの戦線拡大に大反対**しました。日本を総力戦ができる国家にするためには、満州で十分に国力を蓄えなければならない、日本に戦線を拡大している余裕などないのです。
* 戦線拡大に大反対の石原は、参謀本部の中で浮いた存在になり、関東軍に飛ばされてしまいました。そこで上司として石原を迎えたのが**東条英機**でした。石原と東条はまったく馬が合わず、**石原は徹底的に東条をバカにした**と言われています。これがため、石原はついには**陸軍を解任され、予備役**とされました。その後、立命館大学で国防学の講師をしていた石原は、真珠湾奇襲の一報を聞いて、学生の前で「**油が欲しくて戦争するバカがいるか！**」と口を極めて批判したとのことです。
* このような石原莞爾の紆余曲折の軍人人生の背景には、**総力戦への恐怖**がありました。

**欺瞞あるところに言葉の乱れあり**

* 日本が戦争に突き進み国民全員が悲惨な状態で敗戦を迎えるまでには、政府・軍部により様々な欺瞞が行われました。欺瞞あるところに言葉の乱れありです。
* 弾薬を撃ち尽くし敗走するのを『転進』と言いました。正しくは『撤退』です。
* 敵に一人残らず殺されて敗北することを『玉砕』と言いました。正しくは『全滅』です。
* 飛行機で敵艦に体当たりすることを『特別攻撃』『特攻』と言いました。正しくは『強制的自殺爆撃』です。
* 現実をそのまま表現すると欺瞞がばれてしまうので言葉が歪められる。これが東大話法です。

**『守る王』と『守られる王』**

* **外国の王様は国民を守る**役回りを担っています。国民を守るから王は国民から尊敬され慕われます。実際、タイやブータンの人たちはこのように『国民を守る王様』のイメージを実感しているとのことです。
* ところが日本では逆になっています。天皇は国民を守らない。**国民や軍隊が天皇を守ります**。国民・軍隊が盾となって天皇を守る。(天皇は大元帥ですが、軍隊を率いて国民を守るイメージはゼロです。皇居の奥のほうで侍従や女官に守られているイメージしかない。)
* この『国民・軍隊に守られる天皇』はポツダム宣言を受諾するにあたり、**『国体護持』**となって最高潮に盛り上がりました。政府首脳は「ポツダム宣言を受諾しても国体は護持されるのか？」とこの一点に執着しました。

**『守られる天皇』－徴兵制と靖国神社**

* さて、『守られる天皇』の思想はどのように生まれたのか。それは**徴兵制と靖国神社**です。
* 江戸時代には、武士も町人農民も**『家』を守る**ことが重要な責務でした。特に武士は戦争で手柄を立てれば家の禄高が増えます。個人の禄高ではなく、それはあくまで家の禄高です。名誉の戦死をすれば、家の誉となり家督相続もスムーズにいきました。だから、家のために死ねました。

参考:「平清盛」は「たいら**の**きよもり」と読みます。「源頼朝」と「みなもと**の**よりとも」です。「足利尊氏」は「あしかがたかうじ」です。「**の**」がありません。これは、「足利」は「家」の呼称だからです。これに対して「平」や「源」は「氏」の呼称です。

* 家が単位なので、武士の**軍役義務も家単位**です。禄高百石の家は足軽を何人出せ、と軍役義務が課されます。
* 明治6年、徴兵制度が創設されました。**徴兵義務は個人単位**です。一定の年齢になればすべての**個人が徴兵対象**になります。この徴兵義務が家制度の崩壊を進めました。
* 家制度がなくなれば、戦死にはなんのメリットもありません。死んだらそれまでです。
* そこで**大村益次郎は東京招魂社**を作りました。靖国神社の前身です。戦死すれば神として祀られます。だから安心して(?)「国のために死ね！」「天皇のために死ね！」と言うことができるわけです。ここに**『守られる天皇』**が完成しました。

**家制度と戸籍制度**

* 戸籍制度は江戸時代にはなく、明治5年に復活・導入されました。**戸籍制度は家制度の弱体化に一役買いました**。戸籍は旧来の『家』とは関係なく『世帯』という最小単位で家族をひとまとめに登録しました。旧来の家制度のもとでは、じいさん・ばあさん・弟・姉妹たちが生計の単位とは関係なく一つの「家」として暮らしていました。戸籍制度は生計・世帯単位で家を分断しました。
* 戸籍制度の下では、(1)同性の家族を1単位の『世帯』と括ることから、夫婦別姓ができない、(2)婚外子・非嫡出子の差別につながる、(3)そもそも住民登録と重複しており税金の無駄、(4)個人に親族関係が紐づけられていないので、誰が親族なのか分かりにくい・調べにくい(あっちこっちの役所に行って戸籍を取らなければならない)。
* ちなみに、戸籍制度が残るのは日本と台湾のみ。中国では農民戸籍と都市戸籍があるが、これは農民を農村に縛り付けておくための制度となっている。韓国では2008年に廃止された。(ちなみに、著者は戸籍制度は税金の無駄と怒っています。)

**家制度の崩壊と『立場』の台頭**

* 家制度は、徴兵制や戸籍制度の導入により解体されていったが、日本は個人主義の社会になったわけではありません。
* 家制度の代わりに台頭してきたのは、**『立場』**です。明治以降、相手の立場を尊重し、自分の立場を他人から尊重してもらいたいという考え方が台頭してきました。個人の尊重ではなく、**個人に付随する立場**の尊重です。個人主義ではなく立場主義です。
* 『立場』という言葉は、江戸期の文献には見えず、一般的に使われるのは**夏目漱石以降**と思われます。漱石の作品では、しばしば使われています。
* 現代の我々は、「この稟議が否決されたら私の立場がない」とか「君、そうは言うけど、彼の立場も尊重しなきゃ」とか、立場が重要な価値基準になっています。個人ではなくその人の立場です。**『立場原理主義』**です。
* この立場原理主義の日本人が満州の暴走を起こしたのではないだろうか。政府の不拡大方針を無視して、軍部は日中戦争へのめり込んでしまった。つまり、石原莞爾や板垣征四郎、林銑十郎の**立場が尊重**されたがため、彼らの軍規違反は不問にふされ、それがため、手柄を立てるためならルールは無視して構わない風潮がまん延した。ルールよりも立場が重要なのです。**日本人はこのロジックに非常に弱いように思えます。**

**今、日本は満州国である！**

* ここでも著者は怒っています。**日米安保条約**の条文は、**日・満議定書**のコピーとしか思えないような文章になっている。参考に日・満議定書の条文を以下に掲げます。

『日本国及び満州国は締結国の一方の領土及び治安に対する一切の脅威は、同時に締約国の他方の安寧および存立に対する脅威たるの事実を確認し、両国共同して国家の防衛に当たるべきことを約す』(←日米安保条約の条文とそっくり)

* 敗戦で日本は満州国を手放したが、それと同時に日本は米国の植民地になった。日本の首都圏の上空は、今もアメリカ軍が航空管制している。アメリカ軍関係者は横田基地や横須賀基地にやって来ると、ヘリコプターで六本木ヘリポートまで飛び、そのままアメリカ大使館や米軍専用ホテルに移動できます。つまり、パスポートがなくても自由に日本の中を動け回れる(米軍基地であれば)。これは、日本はアメリカの植民地だということである。

以上